国学者と幕末という時代

山崎芙紗子

はじめに

慶応三年（一八六七）十一月、坂本龍馬が僚友の中岡慎太郎と、京の潜伏先で何者とも知れない浪士に襲われて落命したことはよく知られた衝撃的な事実である。幕末の京都では元治元年（一八六四）の池田屋騒動で新撰組に討たれた者をはじめ、斬られて死んだ志士は数え切れないことだろう。坂本龍馬の遭難とその場の状況が酷似しているのが本稿で採りあげる鈴屋派国学者の藤井高雅（たかつね）（一八一八〜六三）の場合である。ただ高雅の場合は、多くがそうであった尊皇攘夷派の志士ではなかった。

幕末にかけて過激になった尊皇攘夷の思想には、江戸中期からさかんになった国学が大きく影響していた。国学は、中国の復古思想が日本に波及して江戸時代に起こった一種の文芸思潮であった。国学は、漢詩漢学の復古運動の影響を受けた和歌の上の復古運動から始まり、古代人の精神を知るという目的を実行して行くにつ

れ、現在は幕府が政治の実権を握っているが、古代の姿にもどって天皇が主権を持つのが正統な国の在り方なのである、という考え方に繋がっていくことになったのである。したがって、国学と尊皇思想は深く結びついていると言っていい。江戸後期には王朝へのあこがれが一般庶民の間に見られるようになる。上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間猿』(明和三年刊)にも国学にかぶれる町人の若者がとりあげられているが、(1)とくに地方で王朝文化に憧れたり和歌を詠んだりすることがさかんになっていった。このような時代風潮は、神に奉仕する神職にとっては願ってもないことであった。彼らはもともと歌を詠み、祝詞を作文し、日本書紀を普段から勉強していた。神の事績を讃えることが生業だったからである。ここに取りあげる藤井高雅も、そういう神職の家に生まれた。

高雅の遭難を直接伝える確実な史料をまとめたものとして井上通泰(御歌所歌人。柳田国男の実兄)の「大藤高雅遭難始末」(2)がある。また、戦争中の昭和十九年に当時の六高教授だった藤井駿による『藤井高雅』(3)が吉備津神社から発行されており、当時はまだ各社家に残っていた史料にもとづき、的確な考証がなされている。それからさらに七〇年を経た今日となっては、それを越える考証を行うことは難しいが、本稿はこれらの先行研究に基づきつつ、新しい知見を少し補ってみたいと考える。

一

幕末の文久三年(一八六三)、備中吉備津宮(現吉備津神社=岡山市)の神主だった藤井高雅は、家督を長男に譲

り名前を大藤幽叟と改めて上洛していた。まずはその遭難事件の概要を「大藤高雅遭難始末」によって紹介しておく。

藤井高雅は六月二十八日から京の室町三条下ルの播磨屋(山田)源兵衛方に逗留していた。七月二十五日の暮六ッ過、国元から来たと称する侍たちが訪問し、高雅の下男の喜代蔵が取り次ぐのを待たず彼について部屋に押し入り、黙ったまま高雅の首を掻き切って持ち去った。このときそれらしい4~5人の男を往来で見かけたという目撃情報はあったらしい。主人の山田源兵衛が外出から帰って来たときには、おびただしく血が流れ、遺骸には首がなかったという。居合わせたはずの喜代蔵はそのまま行方知れずになった。源兵衛はすぐに奉行所へ届けた。翌朝になって、三条の西詰に高雅の首がさらされ「天誅」であるとして「罪状」が添えられているのが見つかった。これは多くの人が目撃し、中には高雅の顔を見知った者もいてその場の状況をそれぞれに記した史料が複数残っている。

その「罪状」とは、「幕府老中の板倉周防守(勝静(かつやす)、文久二~元治元 老中)、水野和泉守(忠精(ただきよ)、文久二~慶応二老中)に協力し、砲台を建設すると称して富家に出入りし、大金をむさぼろうとした」というものであった。高雅は琵琶湖と京の鴨川の間に運河を掘ることや、紀淡海峡に砲台を建設する海防策を幕府に献策し、資金獲得に奔走していた。幕府の許可を得たところから、尊攘派の浪士に公武合体派とみなされて襲われたと見るのが今日では一般的である。一介の神主が老中と協力し、砲台建設を計画し、資金集めに奔走した、という事実

は、現代の常識から考えればあり得ないことで詐欺ではないかと思われるであろうが、実際に老中から許しが出ていて、これは意外にもまっとうな話だったのである。そのわけは後述するとして、事件のその後の推移を追ってみよう。

藤井高雅はこの時四五歳、本居宣長の高弟で吉備津宮の社家頭だった藤井高尚(一七六四～一八四〇)の養孫で、備中の鈴屋派国学者歌人として知られていた。また実母の喜知は大坂に適塾を開いていた緒方洪庵の実姉であった。そういうわけで遭難の生々しい状況は、山田源兵衛からすぐに大坂の緒方家に報告され、緒方家は一同驚愕、洪庵の養子緒方拙斎が二十七日の未明に、備中にいた高雅の実兄の堀家輔政と長男の紀一郎に事件の第一報を書き送った。緒方家にとっては、前年から江戸に滞在していた洪庵が前月五四歳で急死したばかりで、「うち続く凶事」であった。拙斎は高雅の母の喜知には惨殺されたことを知らせないようにと書き添えた。手紙を受け取った郷里の人々の混乱はいうまでもなかったが、悲しんでばかりはいられなかった。国元へは、八月二日に山田源兵衛からの飛脚も到着した。源兵衛は、遺骸は鴨川の東岸、三条上ルの心光寺に仮埋葬する許可が出たためとりあえず埋葬し供養したが、後始末のために少なくとも男性親族一人は是非上洛してほしい、と願っていた。しかし、郷里から家族が駆けつけることはなかった。郷里の人々はもっと大きな事後処理に追われていた。吉備津宮に累が及ぶことが問題だったのである。藤井紀一郎と堀家輔政は社家頭であった。社家頭は全部で五名いるので残り三名で合議をし、吉備津宮を所管する京の吉田家と連絡をとり、高雅は吉備津宮から「永の御暇」、七月三十日付けで「除帳」され、出奔したものとみなされるよう取り繕われた。跡継ぎの

紀一郎は当分謹慎と決まった。神主は純粋な武士ではないが、「従五位下下総守、社家頭」という肩書きからしても不名誉な死に方であった。幕府の権威がなくなり、何が是で何が非か、わからなくなっていた時代であったから、難しい判断をしなければならなかったようである。故郷におけるその葬儀も、実兄の堀家輔政が一人でそっと遺髪とへその緒と抜けた歯を持って、一族の墓地に埋葬しに行ったというから、世をはばかった寂しいものだった。天下国家に関わるということは、情報の少ない地方で理解されることではなかったのであろう。だが高雅の遭難は全く予想されなかったわけではない。高雅の性格を知る親戚縁者は心配しており、最悪の結果となってからは結束して被害を食い止めようとしたにちがいなかった。中には敵討ちを勧める者もあったというが若い紀一郎に自重を促したのは、洪庵の姉で祖母の喜知であったらしい。それ以前の洪庵の手紙などからも喜知は一族から一目おかれていたらしいことがわかる。

幕末の動乱期には吉備津宮も財政的に逼迫しており、高雅の家も生前から相当な借金を抱えていたところへ、高雅の遭難で一挙に経済的にも破綻をしてしまったのであった。高雅と親しかった倉敷の富商・大坂屋は、紀一郎に残された多くの借金を、本居宣長の短冊一枚を所望するかわりに帳消しにしたという。紀一郎の手元にはまだ宣長の書簡など残っていたと思われるが、宣長の自筆のものは乞う人が多かったとみえて、いろいろな所に保管されている。さまざまの経緯があって、紀一郎は一時的には吉備津宮を離れたものの、明治に入ってから復帰した。しかしさらにその後嗣も若くして亡くなったため、現在その屋敷(松屋)は岡山大学の所有となって保存されている。

高尚や高雅の関係史料は、子孫はいたものの、家としては絶家になってしまったので、明治になって前述の井上通泰の所蔵になり、東京に移管され大正十三年の関東大震災でほとんどが焼失したと言われている。ただ、それほど貴重でない資料の中には運良くまれに残ったものがある。本稿では筆者がたまたま入手することになった『安政詠草』(4)という一冊の歌文稿を手がかりに、高雅の幕末期の文学活動を追ってみることを試みたい。

ここで高雅の生い立ちを少し詳しく述べておこう。

高雅は、文化七年、吉備津宮の神主・堀家徳政と近郷の足守藩の佐伯家の娘・喜知の次男として備中国賀陽郡宮内村に生まれ、幼名を光治郎といった。生家の堀家家は、多いときで四、五〇軒あったとされる吉備津宮の社家の中でも、社家頭をつとめる五軒の家の一つであった。五軒のうち、二軒が堀家氏、三軒が藤井氏である。藤井氏の一軒は文章家として名高い藤井高尚の家で庭に松が多かったので「松屋」といい、別の一軒の藤井氏は現宮司家であるが、江戸派の加藤千蔭に入門して「樫屋(かしのや)」と言った。高尚の長男藤井高豊が文政八年三五歳で他界するが、男子がなかったため、光治郎は七歳で高豊の娘・松野の許嫁として養子に入った。当時のしきたりでは養子の一代は家督を継げるが、神事は遠慮しなければならなかったが、五軒の中から養子を迎えた場合は実子と同じ扱いになったのである。この縁組みはそういう観点からなされたもので、江戸期を通じてこの五軒の家は重層的な血縁関係にあったものと思われる。五軒の屋敷も同じ村内で、養子と言っても光治郎は一二歳までは実家で育った。光治郎が元服して高起と名乗り一七歳で家督を継ぐまで、高豊の死んだあと老齢の高尚が再び社家頭に復した。高起は高雅の最初の名である。この頃訪れた安藤野雁が高起に会い「稀代の

美男才発」と評している。高尚は天保十一年七七歳で世を去った。高起は高枝（たかえ）と名を改め、天保十二年、二三歳で吉備津宮の社家頭として江戸に下向、将軍家に御祓箱を献上するというほぼ一生に一度の大役を勤めた。さらに、弘化二年二七歳で従五位下下総守に任ぜられた。この年は、天保六年から十年がかりで進めてきた吉備津宮の社殿の屋根吹き替え工事が完成した年でもあった。翌弘化三年、妻の松野は長男紀一郎を生んだがその日に亡くなった。その後迎えた後妻の若枝も、安政二年高雅三七歳の時に二七歳の若さで先立っている。

藤井高雅は、養祖父高尚の営んだ松屋を継いで後松屋（のちのまつのや）と称したが、高尚が亡くなった天保十一年にはまだ家督を継いで五年目で二二歳の若さであった。その後三十歳前後で家号を大藤と改め、高雅と称したようであるが、四五歳で不慮の死を遂げるまで、約二〇年間が、国学者として彼が独り立ちし活躍した期間である。

高尚の弟子で若年の高雅の指導を担当したのは、平田篤胤の門下としても知られる業合（なりあい）大枝であった。大枝もまた備前国豊原北島神社の神主であった。高尚の勧めで平田篤胤に入門した。この平田篤胤と伴信友の二人は、本居宣長に入門しようとしていた矢先に宣長が他界したため名簿を霊前に捧げたので「没後の門人」と称される。篤胤は秋田の人で、江戸に出て苦学し思想家として大量の著書を著した。宣長の門人には裕福な町人で和歌や古典文学をたしなむ者が多く、時流に乗った篤胤の学問に理解を示す人はむしろまれだったが、藤井高尚は神道家の立場から宣長没後の鈴門の中では最も篤胤の著述を高く評価し、江戸の篤胤邸に数ヶ月逗留したりもした。当時の国学者達は、県居（あがたい）派や鈴屋（すずのや）派など同じ流れの中では分野別に師匠を何人も持つことは珍しくなかったので、高尚の門人は多く篤胤にも入門した。しかし、篤胤は歌や文章の添削には適さなかったので、

鈴屋派内でも歴史や思想の方面に関心がない町人層は、篤胤をむしろ排斥した。篤胤は、源氏物語などの「みやび」とは、かけはなれた人物だった。高尚から和歌や中古文学のみやびの薫陶を受けて育った高雅が、平田派の国学者であった大枝の指導も受けたことは高雅の国学に歴史や思想への関心を植え付けたと言ってよいかもしれない。大枝は、賀茂真淵（かものまぶち）の『新学（にひまなび）』を批判した桂園（けいえん）派の香川景樹の『新学異見』に対抗し、『新学異見弁』を著して激しく反論したことでも知られている。

二

緒方洪庵、萩原広道、山田方谷など、高雅に近しくて有名な人々の研究が医学史や文学史の分野で進む中で高雅関係の史料が紹介されることがよくあるが、高雅その人を対象にした研究は、前述のようにあまり進んだとは言えない。

緒方洪庵（一八一〇～六三）は文政九年、一七歳のときに大坂の留守居役として赴任した父に従って大坂に出たことがきっかけとなり、一大決心をして大坂の洋学者の中天游の思々斎塾に入門した。じつは、中天游は丹後の人だが名を玉樹といって藤井高尚に入門し、文政六年頃小柴（こしば）の屋という国学塾を設けて高尚を講師に招いていた（拙稿「藤井高尚と鐸屋（ぬでのや）」）[5]。文政八年に洪庵の甥の高雅が高尚の養孫になっているから、郷里の親戚関係がこの学縁を招いたと言ってもよさそうである。その後緒方洪庵は長崎に遊学し大坂にもどったが、たちまち名医として名を馳せ適塾を開いて多くの有能な人々を育てた。種痘の普及に功績があったことは周知の事実で

ある。一方、あまり知られていることではないが、国内外の情勢を逐一郷里の甥の堀家輔政や藤井高雅に書き送っている。彼らも身体療治のためとして大坂の洪庵の所へたびたび来ていたようである。洪庵は蘭学を修めた蘭方医だから尊皇攘夷とは無縁、と思われそうだが、逆に海外情勢を人一倍敏感に感じていたことがわかる。だから、高雅の紀淡海峡の砲台建設は、列強が日本を狙っていて日本は清のような目に遭うのではないかという情報に基づいた献策であったようだ。洪庵は高雅の企画にどうやら賛成していたようで、内容までは特定できないが高雅の考えを肯定した自分の書簡を「火中」にするよう書いているので、関わって事情を知っていた可能性がある。

また高雅の親友とも言うべき萩原広道(一八一五〜六三)が、弘化二年岡山藩に退去届を出して、文筆で身を立てようと大坂に来ていた。多くの書物の出版に関わり、また貧困にもかかわらず、画期的な注釈書『源氏物語評釈』(安政元年刊　萩原広道著)の出版費用を諸方に募っていた。緒方洪庵は歌をたしなみ、萩原広道を招いて源氏物語を講釈させたりしたが、広道は今の大坂では源氏物語の講釈は人気がなく、高尚のライバルだった村田春門が盛大に門戸を広げたようには行かない、と高雅に嘆いている。文化文政から天保にかけて大坂で活躍した宣長門の村田春門は門人が多く、のちに老中となって天保の改革を行った水野忠邦を門人にし、忠邦の江戸出府に伴われて江戸に移住したほどであった。洪庵は『源氏物語評釈』の原稿を歌人で幕臣の久貝正典に見せるなど、広道を懸命に援助した。しかし、春門が活躍した天保までの状況と、弘化以降の幕末の大坂の状況は、今日的な表現を使えば国学に対するニーズが変化していたというべきなのであろう。洪庵、広道と高雅の書簡のやりとりが史料として残っているわけだが、同郷三人の共通点は国学和歌であり、実生活では病弱で

貧困な広道を洪庵と高雅が支え、洪庵は広道を治療もしたようだ。意外にもそれ以上に三人は内外の情報を共有し、国の将来が心配で夜も寝られないと嘆き合っている。高雅の海防策の実行を、洪庵と広道は止めるどころか賛成していたふしがある。しかし文久二年、緒方洪庵は将軍の侍医に推挙されて、江戸に出、奥医師兼医学所頭取となってしまった。そして過労から文久三年六月に急死、そして七月に高雅が遭難、十二月には広道も病没した。奇しくもこの三名は同じ文久三年に亡くなっている。三人の年齢は洪庵五四歳、広道四九歳、高雅四五歳であった。

高雅が隠居の身となり、おそらくは用心のため名前も改めて上坂した文久三年には、吉備津宮から遠くない備中松山藩の板倉周防守勝静が老中になっていた。備中松山藩の重臣で儒者の山田方谷(一八〇五～一八七七)は、藤井尚澄編『類題吉備国歌集』(後述)に序文を寄せているように高雅と親交があった。方谷は文久三年の四月～五月、京都における勝静の幕政顧問となっていた。この時期に方谷を通じて、高雅が献策を行ったと考えられる訳である。

山田方谷は、江戸の佐藤一斎に学び、佐久間象山とも親交があった人物である。才能を見いだされて登用され、備中松山藩の藩政改革を断行し藩は逼迫した財政を回復することができた。方谷は内政における手腕で藩主の信頼を得、出府して幕政にも関与した(『岡山県史』近世Ⅲ五八〇頁)(6)。方谷は、明治維新に際し幕府方とみなされて滅亡の危機に陥った藩を、開城の方向に導いて救った人物として、またその優れた財政改革の手法が再評価されている。財政破綻におちいった地方自治体を救うことが急務となっている現代で、近年にわかに注目されている人物である。方谷が仕えた備中松山藩主の板倉周防守勝静は松平定信の孫にあたる。板倉家は江戸

時代を通じて代々幕府老中を務めた家柄である。方谷の仲介があればこそ、一介の神主の献策を老中が認めるという、いくら幕末でも信じられないようなことが実現したのであろう。

しかし、土木工事は何万両という莫大な費用が必要であった。高雅は、今後大坂に長く滞在すると書簡にのべているので、国学を通じて高尚と親交があった大坂の豪商殿村家などをあてにしていたものと考えられる。宣長の鈴屋門には伊勢松坂の富裕な町人達がいたが、その縁続きの豪商が大坂にも居て、高尚などの国学者を招いたりしていた。それを手づるとして高雅は海防の必要性を説くつもりだったと思われる。その目的は攘夷であったが、実際的な海防という着眼や、京都と琵琶湖間の疎水の開通という今日から考えても充分有意義なことを考えていたということになる。

三

国学者としての高雅の業績を俯瞰する手立てとして、弟子の藤井尚澄に編集させた『類題吉備国歌集』（嘉永三年刊）の奥付に著述目録があるので次に引用しておく。

清少納言枕草子参考	十二冊
狭衣物語釈	十冊
古今類語解	二冊
八代集類語解	五冊

満豆佐久宇米　　　　　三冊
助辞語格便覧　　　小本　二冊
志多毛美地　　随筆初編　二冊
古今和歌集新釈　高尚大人遺稿　高雅大人補欠

製本書林　河内屋喜兵衛
河内屋儀助

版元は、高尚の著書を多く出版してきた当時の大坂を代表する書肆・河内屋儀助である。中でも『古今和歌集新釈』は高尚の遺稿を校訂して出版しようとしていたものである。高尚は注釈書に「新釈」という題を付けることが多く、これは真淵・宣長の先行注釈を意識した命名である。高尚は著書を出版する場合、弟子で国語学者の若狭小浜の妙玄寺(東條)義門の校閲を頼むのが常であった。『古今和歌集新釈』も同様であり、高尚の他界後も義門は、校合を完成させるために備中まで来て滞在した。また小浜から原稿を訂正したものを河内屋儀助に送ることを高雅へ手紙で知らせていることなどからも出版準備がかなり進んでいたことが察せられるが、実際は江戸時代には出版されず、完全な原稿がそろわないまま後に井上通泰によって出版された。

『枕草子参考』も、十二冊としていることから、高雅の著作とは考えにくく、高尚が原稿を書いていたが完成はしていなかった『枕草子新釈』と考えられる。本書の出版に関しては、当時大坂にいた萩原広道が河内屋との交渉をしていたことがわかっている。高雅より四歳年上の萩原広道は弘化二年三一歳で大坂に出たが、も

とは岡山藩士であり、岡山近郊の吉備津宮の社家の高雅と若いときから親交があった。宣長の門人で源氏物語はじめ中古文学を研究した高尚と、幕末に源氏物語の画期的な注釈書『源氏物語評釈』を出版した萩原広道、二人の仲介点に高雅がいたのである（拙稿「源氏物語評釈の方法」）[7]。結局、この『枕草子新釈』は『藤井高尚全集』（昭和二十五年、藤井孝編）に収められている。

上記の目録のうち、『狭衣物語釈』も高尚が書こうとしていたものであり、こうした状況から、国学者としての高雅は、高尚のやり残したことをやり遂げようとする意識が強かったと想像される。高雅もまた、古今和歌集や中古の文学作品の注釈を志していたと知られよう。高雅の研究の方法は高尚から引き継いだ当時としては先進的な鈴屋派の合理的実証的なものであったと思われる。後述するが、それは歌人としての活動に制約を生じさせるものでもあった。

ここに和歌集の類語解が列挙されているのは、歌人として古語への関心が大きかったとみるべきであろう。高雅が、吉備津宮周辺の神主を中心とした歌壇を率いていたことは確かである。

『類題吉備国歌集』が編まれるほど、高尚・高雅周辺は歌詠みがさかんであった。神主家では当主だけでなく家族全員が歌を詠んだと思われる。高雅の二人の妻もそれぞれ『吉備国歌集』に入集しているほどであった。

高雅は高尚の遺稿の『古今和歌集新釈』の出版を企画していたことなどからもわかるように、古今調の和歌が得意だったようであるが、中でも特徴的なのは「詠史」に分類される歌が多いことであった。「詠史千首」

という作品があったことが知られる。これは一八世紀の国学者にはあまり見られない特徴であった。詠史が進化するとさらに、国を憂い、志を述べるようになる。これも幕末の和歌の特徴である。志士が志を述べた和歌は、戦後文学作品としてあまり評価されなくなっているが、漢詩の分野では、世に容れられない悲憤慷慨を述べることは伝統的に存在するテーマであり、日本でも和歌によって出世したり登用されたりした例もないわけではない。立派に文学の一つのテーマだが、論理的な叙述が可能な漢詩に比べ、和歌の三十一文字でそれを表すのはなかなか難しい。少ない文字数ではいきおい覚悟や感情を示すことになろう。

『安政詠草』には、安政五年の部分に、姫路の門人たちから送って来た歌があり、高雅の志が述べられているともとれる歌が添えられている。以下にその部分を引用する。

姫路赤堀正心井上真昌八代池内真貫らよりおこせける歌　真昌

道たえし谷間のいほもふち浪のかけて匂はむ春をこそまて　正心

たのむかな君がいさをにあとたえし神の大みちやかてふみみん　真貫

とことはに匂はむまつにとかへりの花の言の葉さきそめてけり

右のうたともおこせけるときの文のかへりことする序に

いひつかはしけるうたとも

人くさのためといそしむまこころはやかても神の御たまならすや
まこころは神のみたまそ真こころにおもひおこししことならしやは
わたくしの願わすれておほやけのためといそしめ我うましとも
いさともに八はりのすがそうちはへてまよひゆくよをはらひ清めむ

姫路の人たちの歌は、高雅の「松屋」をたたえ、その奮起を期待しているようにも受け取れる。これに対して高雅はそれとなく返事のついでに自身の心境を詠んだ歌を四首添えて送ったというものだ。

安政五年は、四月に井伊直弼が大老に就任、七月に島津斉彬が病没、世の中は大きく変わり、安政の大獄が始まった年である。最後の歌の「まよひゆくよ」は世の中が混迷をきわめていることをさしているととれる。「いさともに……はらひ清めむ」の意味は、「さあ、いっしょにこの混迷の世の中を祓い清めよう」という、表向きは神主がお祓いをしようとしているふうにも取れるが、本意は憂国の志を実行に移そうと呼びかけているようにも解釈できる。「我うまし」は「私の(国の)すばらしい(立派な)人たち」で、姫路の門人であると見てよいであろう。彼らとの間に、共鳴する何かがあった、それは尊皇攘夷や「世直し」の志であった可能性が高い。高尚が生きた一八世紀後半から一九世紀前半と、高雅が生きた一九世紀前半から幕末にかけては時代の様相が異なって、文学作品の傾向も次第に変化していたと見るべきであろう。

『安政詠草』は安政五年高雅四〇歳から始まっているが、その五年後文久三年に、冒頭で述べたように高雅

は不慮の死を遂げたのであった。ペリーの来航が嘉永六年、翌年の安政元年に日米和親条約が結ばれ、安政五年には井伊直弼が大老になり、安政六年は安政の大獄が始まった。橋本左内、吉田松陰など多くの逸材が死罪になり、翌安政七年（万延元年）には桜田門外の変がおこり、井伊大老が暗殺された。幕府の権威は大きく揺らぎ始め、世の中は騒然となっていった時代であった。こうした時代にどのような歴史に興味があったのか、高雅の『安政詠草』の中から、「詠史」の和歌を挙げてみよう。

安政七年

詠史

和田海の神の宝といひつらむ其玉つるき（すめろきの）玉つるぎは（や）も

源平合戦のとき、宮中から平家によって持ち出された三種の神器の一つの太刀は、清盛の妻・二位の尼が安徳天皇を抱いて入水したとき携えていたが海中に沈んで行方不明となった。その神宝の太刀を詠んだものだが、背景には平家物語に描かれた平家の悲劇が詠み込まれている。

菟道皇太子

咲かは又これも難波の春の色におくれしとおもふうちの山吹

日本書紀の応神紀に記される、応神天皇の後継争いの話。天皇には三人の皇子がおり、最もわかい菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）が後継として応神天皇に指名されるが、兄の大鷦鷯皇子（おおさざきのみこ）（後の仁徳天皇）に皇位を譲ろうと、辞退して自殺してしまう。難波は仁徳天皇を象徴し、宇治の山吹が菟道稚郎子を象徴する。もし、菟道稚郎子が即位をしてい

たなら、仁徳天皇にひけを取らない立派な天皇になっていたにちがいないと菟道稚郎子を讃えた歌。この皇位禅譲の話は、日本書紀では仁徳帝を中心に記述され、一方古事記では淡々と記述されている。ここでは兄に皇位を禅譲した郎子を讃えている。これは国学者たちの関心の高かった事件で、上田秋成の『雨月物語』の「白峯」でも引用されている。

同じく菟道稚郎子を詠んだ歌が短冊で残っている。

　　おほかたは敷きしのばししからにしきいしくもきみがやらせつるかな

　　　幸逢太平代

　君か代にあはすは何を玉鉾の道の教とたとりたにせむ

　　　神事

　天皇も石灰とのにおりたたしつかへますとふかしこき神わさ

また当代＝徳川時代の人物、を取りあげたつぎのような和歌もある。大老酒井忠清と争って五代将軍綱吉の擁立に成功した堀田正俊（一六三四〜八四）を詠んだもの。

　　　当代詠史

　　堀田筑前守正俊　　　　　安中侯　常憲院殿ノ始

　秋虚のこかのわたりのほとときすその初声はゆかしかりしを

堀田正俊は下総国古河藩主でのちに大老となった。正俊を利根川のほとりの古河の「ほととぎす」にたとえ、偉大な政治家の若かった頃に思いを馳せたもの。この歌が詠まれた安政七年の三月に、井伊大老が暗殺された。

崇徳院の□祭に奉るへき歌

いはまくもあやの御けしにかかるともしらて真柴の露やこほれし

こは如意山にての御事をおもひて也

崇徳院が保元の乱に敗れたとき、三井寺を指して落ち延びようと京の東山連峰の如意ヶ嶽（通称大文字山）に逃げ迷ったことを同情して歌ったもの。

崇徳院をうたった歌は「藤井高雅自選歌集」の雑部巻頭の一首もあり、

備前国児島の天皇山は崇徳天皇讃岐国へいでましの時いこわせたびける所とぞ

そこよりあやの松山見わたさる

ながめつつかへらぬ波のゆくへとはおぼしやかけしすめろぎの山

捕らえられて讃岐の松山に流された崇徳院が備前を船出するときに休憩した山を天皇山といった。その山からは、配流先の松山など四国の山々が見えたのであろう。用語からは伊勢物語を彷彿とさせるが、同じく崇徳院に同情をよせたもの。

『安政詠草』ではないが詠史の類には次のような珍しい歌がある。

三国志をよみけるとき張飛を題にて

ひもつるぎとけてうまいの小枕にさめぬ夢をもむすびつるかな

豪傑張飛が泥酔して眠り込み、恨みを抱く配下に討たれてしまったことを詠んだもの。国学者は普通表向き儒教や中国は好まず、三国志演義を読んだことを平然と書いているのも珍しい。こうした歌が詠まれるという

ことは、詠歌をたしなむ人々の間で三国志演義の内容が共有されているということであるから、興味深いものがある。

四

晩年の高尚は、当時の鈴門では珍しく、宣長の没後の門人を称した平田篤胤と親交があり、篤胤の思想に共鳴する部分があった。それゆえ、高尚の門下は、業合大枝をはじめ、篤胤の門下になったものも少なくない。当時の国学者歌人は賀茂真淵や本居宣長などの流れを汲む国学者の中で複数の人に入門することはよくあったが、桂園派の勢力の傘下に入ることは裏切り行為とみなされていたようだ。一九世紀の歌壇は、桂園派の人気が鈴屋派を圧倒し始めており、高尚の生前から備中ではとくに両派の激しい争いとなっていた。没後はその傾向がますます顕著になり、高雅は高尚の後嗣として歌壇ではきびしい状況に置かれたと言えるだろう。高尚は吉備津宮のそばに、社家の子弟らが国学を学ぶため鶏頭樹舎(かえでのや)を設けていたが、これを経営するのも後継者の高雅の役目であったと考えられる。

わずかだが、高雅の伝記の先行研究に付け加えるべき事項が『安政詠草』安政六年の条に見えている。該当の部分を下記に引用しておく。

世にまさは見せもきかせもとはかりにかひあることもかひなかりけり

十二月十一日の夜とみ次郎かうせけるとき
こはことし正月廿七日にうまれたる子にて
侍女きぬかうめる子也
おなしをり今はと見えけるに日ころいつき奉る神たちの御まへに
我いのるしるしあらはせ子をおもふおやの心の神ならは神
歳暮に
子をおもふこころのやみちたとるまにとしの別もちかつきにけり

高雅は二人の妻に先立たれた後、村内出身の身の回りの世話をしていた江口きぬという女性との間に子があったことは知られていたが、以上の記事からはとみ次郎と名付けられた男の子が満一歳に満たないで亡くなったことがわかる。この引用の部分はほかの史料に見えないが、おそらく歌稿として書き付けたもので本人は公開のつもりはなかったことだろう。成人した男子は紀一郎のほかに二名あって、他家へ養子に入りそれぞれに出世した。

おわりに

以上に述べたように、藤井高雅の周辺には、藤井高尚だけでなく、緒方洪庵や萩原広道や山田方谷などのそ

れぞれに傑出した人物がいて、国学を媒介にした広い人脈があったことがわかる。それが、高雅の憂国の志士としての活動を可能にしたことも理解されると思われる。立場は異なるが、大老・井伊直弼と、その右腕となって安政の大獄を遂行した長野主膳義言（よしとき）も、国学を媒介に親しくなったのである。これについてはまた稿を改めて述べてみたい。この時代を動かしたものは国学の思想面だけでなく、国学の人脈は大げさに言えば政界と財界につながっており、そこで果たした役割も小さくなかったといえよう。

また、文学史の大きな流れから見れば、江戸後期の文化爛熟を迎える化政文化の時代はせいぜい天保までであり、弘化嘉永からあとは、ペリーの来航を契機として騒がしくなった世の中の情勢を反映し、国学もみやびの面は後退して憂国の志を述べる必要性が大きくなったと見ることができよう。ところが、国学の研究が進み、和歌・和文はともに中古文学を手本にした雅語、つまり非常に限られたやまとことばの語彙で表現しなければならない制約ができていた。たとえば天皇は「すめろぎ」と言い換えられるが、「海防」はどうやまとことばに訳すのか、「さきもり」などと訳せたとしても、すっかりのんびりした文章になってしまう。この表現内容の需要の変化に対応することは「和文」では難しかったと見ることができる（拙稿「和文」＝『講座　元禄の文学』第一巻所収）(8)。幕末はおそらく多くの人々が胸に訴えたいことを持っていた時代であったが、和歌和文は漢文とちがって実用表現の手段になれなかったという問題がある。

一方で、志士たちが遺した膨大な和歌は、戦後あまり顧みられなくなったのだが、文学の伝統的なテーマの中に、国を思い国を嘆くものはあるはずなので、内容はともかく文学的価値が見いだされるものも今後は出てくると考えられる。「国破れて山河あり、城春にして草木深し」と、杜甫がうたったように。

注

（1）巻四の一「兄弟は気のあはぬ他人の始」で古典研究に没頭し伝授をありがたがって財産を失う弟を描く。『雨月物語』の「蛇性の婬」にも通じるところがある。
（2）大藤家文書によって井上通泰がまとめたとされるもの。山陽新報に掲載された。
（3）吉備津神社編とされるが、実際は藤井駿著。付録として高雅の歌集、年譜、系図などを収める。
（4）書誌を掲げておく。判紙本一冊。袋綴。署名はないが藤井高雅の自筆。墨付五〇丁（ただし一二丁は白紙）。外題「安政詠草」と自筆墨書。藍色無地表紙。蔵書印なし。内題なし。用紙は罫線入りのもので裏表紙見返し右上に「龍野上河原町前田屋小助」と達筆で書かれている。
（5）『国語国文』第四六巻一二号（昭和五二年一二月）所収。
（6）『岡山県史』第八巻（昭和六二年三月）　五八〇頁参照。
（7）『国語国文』第五一巻三号（昭和五七年三月）所収。
（8）勉誠社刊。全五巻。第一巻のテーマは「元禄文学の流れ」。